江代充『切抜帳』（思潮社、2019 年）読書会レジュメ

中島水緒（2021/08）

◎『切抜帳』について

1952 年生まれの詩人による 14 年ぶりの詩集。2020 年の高見順賞受賞作。

◎読書会の進め方

小説や批評を読むのと詩を読むのとでは読書の体感速度が異なる。個人的な感触として、一冊の詩集を読み終えるには「とても時間がかかる」。詩を読むのに時間がかかるのは詩の読み方をわかっていないからなのか、それとも詩が要請する必然的な条件として肯定的に引き受けるべきことなのか。効率主義的な読書にはならないが、一篇の詩に圧縮された言語の時空間になるべく長く沈潜してみることが詩の読み方を探る上でひとまず大事なのではないか。架空の読書会は無時間的なので、読みの時間を可能な限り「引き伸ばす」ことができるかもしれない（有限を内側から押し拡げるイメージ）。『切抜帳』所収の「語調のために」「想起」を主に取り上げ、一篇の詩をゆっくり読む方式を探ってみたい。

◎なぜ江代充か

江代充の詩は現実観察に基礎を置いており、見聞きしたものを思い出しながら描写していく「想起系」の系譜に位置づけることができる（その点では貞久秀紀と並び比される作風である）。視覚と言語、ふたつの機能をはたらかせながら読むにあたって格好の対象となるのではないか。

◎詩を読むにあたって

江代充はキリスト教の信仰を持っており、また詩作品にも信仰の影響が見受けられるが、なるべく詩人本人の信条やバックグラウンドを抜きにして（外在的情報に拠らず）、詩自体から読み取れるものだけを頼りに読み進めていきたい。また、浮かぶ情景があるような気がしても、映像を固定させず（＝イメージ偏重になりすぎず）、意識を詩のなかに回遊させる感覚を大事にしたい。今回の読書会では解釈を導き出すこと（＝何らかの結論を捻出すること）よりも、解釈への着地を回避する読みを模索する。何かを言い当てる――「差押」としての解釈――ではなく、マンションの共有部分にたむろするような、「所有」を目的としない読みを目指す。

◎読みのポイント

・すっと伸びる一行のなかにどんな情報があるか／ないか。何を描写して何を描写していないのか。同時に、行から行への遷移で生じるもの／消えるものを読む。

・後続の文は前文を掛かり受けながら一連の流れを生み出しているように読めるが、本当に掛かり受けているのか。修飾語は被修飾語をほんとうに修飾しているのか。接ぎ木がずれているような継ぎ目が消失しているような語の運びに注意。

・一行のなかで繰り返しあらわれる、所有格とも言いきれない「の」の機能に注目。（「前方の草のあいだ」（「語調のために」）、「粗い土の地」（「降雨」）。そのほか「私は道の端の草を見」（「諸物」）、「いなかの道の片側の空に」（「父の手綱　エジプト逃避」）など）。空間についての感性があらわれる箇所をていねいにほどく。

・あえてひらがなで表記される（ひらかれる）単語はどんな言葉か。文のなかでどのようなエフェクトをもつか（「かがみ」（「語調のために」）。漢字とひらがなの分布に映像と非映像を見る。

・書かれてないことを視覚的イメージで補填しすぎず、説明の薄い描写に注意を留め、出来事の整合性にとらわれず、経験の具象性にもせまる。

・反照を駆使した情景描写をとらえる。

◎引用（二篇）

前方の草のあいだに二人の人がいて
何もないわたしの手もとを見つめていた
胸のちかくに子を抱いて両腕にかかげ
しずかに静止しながら
こちらへかがみの光を宛てるように
子をあやし動かしている
垣の葉むらのすき間が所所で膨らみを呼び起こし
左右から全体に纏まった川のように光りながら動いていて
ちかくの道のなかに
一つ一つの茎のかたちで生い立つものも
他から吹かれたその通りのことばを
くり返すように揺れ始めている
（「語調のために」）

ひと気のない土の空地の
ずっと西の隅のほうへわたしは来ていた
そこで一つずつ種蒔く母と二人
または二人のうちの一人として
数えられる所に　わたしもいるためである
ここへ来るまでに
道で二人の友を見たが
わたしがそこに留まり
ひざを屈したかれらの合わせ脇のほうへ退くと
一軒の白い家の　なじんだ外壁に添いつづけ
こちらにも関わるような枝の葉が
暗く淡いかげを落とした道の半ばへも伸び広がり
それが改めて
あたりの手本となったように思えてくる
（「想起」）

◎読後の感想
江代充の詩では視線の結ぶ先が転々と移動する。ときになだらかに、ときに間歇的に。具象と抽象がまだらに分布されるような、（一望ならぬ）多望的な風景描写こそを特徴とするように思える。対象そのものではなく外堀から浮き出されるものへの視線（「垣の葉むらのすき間が所所で膨らみを呼び起こし」（「語調のために」）、傍らに添うものへの意識の同化（「家屋の壁に沿って続いていた、」（「御幸橋」）、視界に干渉するものとの相互嵌入（「こちらにも関わるような枝の葉が」（「想起」）――主体が切り抜き切り抜かれる風景との距離感を興味深く読んだ。
どの詩も結び方がいい。詩の内部の反響が最後の一行に向かって収斂し、静かに着地する。エコーが詩のフレームからうるさくはみ出すのでなく、あくまで詩のフレームのなかで透明に残響する。このような江代充の詩法から学べることは存外大きいのではないか。